閑田文

貳

函番號	ト / 號
種別	国
冊番號	5?2 號
受入月日	月 日

914.5
317
Vol. 2

蒿蹊荅弁

閑田文艸巻之二

蒿蹊陂叟著

男 資規
同編輯
門人等

滋賀縣第一中學校印

序類

其御殿御初會和歌序

あらしきとしたつといはるものごとふめ、づりたん秘をなるをまへてもし五ヶ年のこゞみとよそそ大殿のうちにもそれをかりもちてなりけるにかはれば御んあゆきにおほしきなりてそのけぢめのうとあきはるかにすともめしゆるしてにしむ春興多よふんの人御題をとらせまゐらする

うけまくも可しこき紀 序にいはゆるさきはひをとめん
[illegible]れりとまふしてよのかしこきれはありけれとものゝ[illegible]
にたえんまても入にしへの[illegible]ありを手く[illegible]すらかて[illegible]
のくにとさかへのおかみのつけさとまもらつたまつり
なつせ給ひしまゝて尚八百日ゆく[illegible]のまさこふ
まつりまてもいくよろつよのかゝる人とのつて[illegible]
[illegible]らのえもまふあえまいてなんてとふふ
よてけりもちなるゝ御こゝろのしこゝろよりて
なり

濃州瑞光寺奉納巻物の序 これ先祖之人の旧跡也

なまてやれ[illegible]も[illegible]もおくの哀きあるる濃
州のはしなかつの[illegible]ひたるあしは百とせまりの
[illegible]月でも[illegible]むり[illegible]えきたみし[illegible]ひとも
よの[illegible]とりまゝはてくりたまはゝ人つまそし
代のそ[illegible]らをとふひきくは[illegible]まり[illegible]ちやとてる
[illegible]にすたりえかくおそつくらもこふ[illegible]ましきる
とうたまらとつらいふも龍(タツ)ことはしめてく
きつかつとおりえ[illegible]たる里すれおれてけれと
つよの[illegible]なかして[illegible]の[illegible]れも月はそらりも一きれ
[illegible]ふくらたのれはしけま[illegible]り[illegible]りの[illegible]田
[illegible]しは[illegible]さまく[illegible]やこまのれすまで待る[illegible]
の[illegible]ゝのとく人もむしの[illegible]もむうふむくくれゝとも
なくさ[illegible]ひ[illegible]るくにこゝろくたてとのくまくしも

奇

あるじをしてにこそれんはなうたゝかけかいそぐ
ふまつのきもちとてさじさし園はうとしもかしうきを
わきわけさしなくうぶひる身ぞにさせてんはふうちど従
したまうつはきこれしやうれづのふしまのうつ日あ
らがうしよ料ほそりぬうれば此もは村とは稽
の画をはゞめうしてはゞの古どられにもさびを
さるさんにけうしをみのれる端さきぐしやきこと仕
よりげしるま宗んはさきたうきとはべあるうしと
はちかゞ俤しくきえられど学ふまんも奥ふられぞ
はさけ篇をは給り
かぐれしきさうしの人乃袖にかりし
名さうりや見きる梅乃しきうち

花山亭勧進歌序

うつきのよみありたるきのえ乃ふられ閑ようゝる
きありしめづらしからねど作りそは名さるふてくめ
こゝあふしもたゞうなるゝ代ふりゆくなむはし哀
なつうそうは侍るめりたれば給うるをみせうし席
見てるを嗣はれしくのなりもほめ給へりくらしま
いうそしはの水乃なかれをくむ人へられちとをと
めて遊ぶと思ふさまはけふもことにわざなり
なりけるにまゝうに山しれのさゆゑあうつ深へ花
山のなるは道心懐しらしきまちりしもおもふ
やけ乃序んよせおもりし傍にに　真乃花乃序門

のこゑをきゝ申しをはげみとして　宮内卿の律
門もこの事みて御飾みえ申しおもひて申さるゝ
きせおはしましほの御道にさへよびよせられけるに
ちかひ元のまゝにてさびしきかりけんとて
慈仁の所へ申されけるとかく申されけれ
ばかりにまかせて浄妙庵主妙覚和尚といひしが
徳ありしをたのみてかくれにけるより後は
ことはりさへいそぐ老のまへにはこれしそへ
一月に談ぜられけるとなん法のつぎなる慈光
律師に仰(オホセ)らるゝによりけりとぞ律師乃ちからいかなく
のちまでもへだてなくぞ遊びてられけり
ろふけてもこそあはれなれしるの伝えたるとて九

うへりのみなおもへなきまゝにとしたいきたまひぬ
なかりしと事なくその名をとりさゝへつきにおくれて
九月ごろりにおりなほしたまひけるにきこゆる事
庵主凡夫のみちをも院主せられしまゝにあまりに
おもふところをおもひて歌よみにやどりたまひき
御なさけ門主に向をすゝめさせたまひにけり
ふかくおもひつゞきまいらすべしとげなくてんざまる
うぞりへんしたまひとのぞみ給ふべき作どもふかくて
なんやかのものゝもとのそれぞれうつりふかく
これのそや御たその事も大事なれども僧正にかゝれと
さしもおもひみ給はりけるつけのなれら
かりぬとりをうけてたやすのあはれにてみえる

とりうさはとやの林ともはなくへうけ給ひし便宜
のふでとかくめ聲とさへ詳されてあひし徳の色
なき巻のうらぶれなきはらたいでくもあらじや
まうし前うつもめでしけるかたにてじくせるたるれ
まかしすることふかうゑてしたつあれバその寺
うさびみてし建ちけ侍る向みくしまれをとうと
ひりてみちゆきるよすれる萬をとら侍よはのはらえ
につとてむつとをとこのぶとのまぐ侍もさぐりぞ
なむことつかりの律師のいさとのそう　家の流まへの侍んよ
せ乃あまわたにはんとなんまのくみえ無山がけも
ほぶこしむのべさはとるき筆をと侍なくり無

萬葉集傍注序

まことにならの葉のことばしも花鳥にちけやく
の世よりさく人まれなりしいつくり侍りとそせ
延喜の貞觀の侍らしのなかさはずりまん色く
ほうりみよびさ家これなどもありあげつてくへても
ちくなれ秋ずりのことおぼろなるを文永のころ仙
覚律師ねのちかきにいうそむかしくはとさよの
らぬとられるは武州のめづらしきことなるや
侍れよふかいくとのもこげくるぬしさいなる
らえ様のしふ井さびさ于してる冠餘の契沖
おぶりなくふも流自物稽さらわといつくんやす
にかりつくさしふ詳さまだ侍くなをれるて

千代をへて又と着して天くだられそりしより
よつてここに荷田宿禰加茂縣主なともつぎの木
はばきふかきちぎりはぞくふかしめいにたえたふかれ
なりそむしらにおよれひときちの國々へつたふる
むかしふるき恵岳人にこそりくふるさかことしもと
えりつゞく言のはをもくに萬葉のうたくよき
こしよるもやすくさふされたるはうたせるのよみ人の
たかちらともきちなる御中にもしまつくらりは
是ちかし申うつきこともかくしはさきとすくく
よりこの大とにいたるまで此集の唐れたると
おくれかうふれにの御なりぬきもはいかぞなは
のさだ太ふ天國の神ちのくさうる沢うたうくふ、

こ世の佛も此集のちふひろごりとまをこひ給
ひてえと隠ひひよろ、ひひにこえくをもしららふうの
太とこさらし外国のきろはひうせみとうる又れ林の
おろし此や氏にしせてはしむれことをうひ述され
なりてきくもいとなるふるまのうさうさげの
さきみんかおわばいふくのいふむべくもいとく
つきるよ草まとそる

いは陽気きあにまつりごとの此しめの乃やしは
よの此れいうくる月さ

契沖師勝地吐懐篇補註序

ちかごろ六十あまりのくになかのなところといふ
ものはしもいへうたまくらのうきことをもしるる
なにはなるなにのよすがとは古くよりいひつたへぬる
やまとのうたのしるべよ井のよまきつかれうしるなき
のは古人のうへどもひさしくひろいてうつくしきものを
よりはすれば古やまかげふかくしもあまれど御らうして
そのひとのかなうとをりて集められけるを書ぐとら
のちの師なまめきにつけてなりにけるひとのかの体
くらるしまそれ勝地の地のうちにさらにとりぐ
まさぐりて伊吹の山のちもなかなか国よりいれまゐる
たびごとなりける元禄のころほひまだの契沖

あがりさまの類字名所集にのりてそのたぐひをあげつらひ
集の書になりてかつ勝地吐懐篇とぞなづけてやまとうたのことを
ことをしりての秘しりかたくしてきまかなくめでたきものは
のひとり其中にかのやくの関のさとのくるしみぬべしもあり
まがへうたのしもきのみちをおもひて山しでてよのたか松のこ
のもれたるふところをめて合せくぶつきことなきたる同じ
つくしらはいくたびとうちかうつせるもおほかたはふさに
の外の人のめさうたなをつけるまくにさまれいのつくし
やとすかまの中のをかさまはやはりまさなんみちのこ
の工が須弥の形をうつされんまなく一人とうちは
ぬいのへきたまひかにかげして御ふ作にて住て
ふ人集れのせるほえ浮つきうちつくさ

伊勢乃うみは渚のあまたいそがはしくこころ所
をもあらはれてはなこゝにたれはつる海松さしえ
づめはちゝのくれなゐの細布やくにえれこそつま稲
そのやすけゝよ、よし、いへば人皆をしはうるまの浜
人ぞみなりなるところのあぢりきてなんるをのくしの
まえうるとせしうたうふ御(タメシ)を引ころたわかさわか
稚(ワカナミ)くろやの山れたゞるくも世中のはなわもあん
さとくゝいとこゝはぬりしかわれがふつの山れどあつ
ばくのやさふりその若(アラハ)さまてもの世の公(オホヤケ)もし
せの鈔(スカキ)をとりあはせ文をも梓乃松本門世といへ
するにきうが日ぐくわがぬえふひしき人のあめに
甲斐が山乃うむかりわれてきし世の浜乃さしるき

さうらぬとうんくは謗(ソシリ)をるもんやはりともあやまれる
ふりくとやりの筆のすみはうけ絵づあがはら
の每なうたは浦山のちれ人のうあるはちふるむまぞ

画師海棠桜花鑑之波

らせしいへば心よぶきまのことに梓うちまもこのつきあれ
くさしうくくわれとりて古(ル)うされんぞくを桜づくよしうやし
て海棠の乃筆のあさひへてきゝし〳〵う句む
やつの何もぞこのめちまのちれどもとし
咲むのりけよこそ見えたゞきでちのあそびさぼ
ちるはさうものふぞ宗峨のうもたく山寺乃てあめ
も彼らぞんのらけき家ばしはしはさ美れは

れのよしつくれこゝにあるとそでむかし親うて垣
友乃あまりけふわか老人も那ふにうしたる新しとかく
ならなるんなでさ色くにめてたきみちてもこゝろむかへの
ひとしやれでやさしく人もまことうつゝくらんやさしく限

摂津國武庫春海著菊葉纒書序

たかつられなしのきふく人これはみのつらしく
いるようもせんさいよしかつ神乃御代ゝもさらぞくは
あかけなかりそにみのれことせうつし花はのうど
になきふく人哥のすぶまとりよまれもしきもの
えへとかくのそうへのせいの代よふつりかも々を

ありさうなにみよびさし待かこふむかし沢むその
春海はなつのそれなるみつゝよぶりとひさしく年
ありしも年なかの一もちにんなるかけられたる又代林の
これらそのうてけるんをさらしむまづかな威
真間のひとふさまたのかずくのたくふ紛れるを
むろうひとしだれまきしいそこ多くすそてしうまくを
けしようもみのれはむぞうしのつらへさはいそて歌う
むのかけ月かりひつるし待つと此人のよろぎしも
あづ夜とみと床てりへしらかしまさしふある
あへこしくらつるふすも行色でくやしくひもある加
のまり乃ふりたされど三接の枚もてくすさしのまた
はやちうえどまや和らん都大もよみりよくうせとらへ

らくらのこふるきえくしるくはゆめつりとたとし
しきやしなれども おもひつゞけて たびのみやこに人も
まえしされども その中にとゞめぬふしぶしあるをとりいでて
せんずべく補ひ 西ももとゐるふしあれども
かくばかりたんをとりて書きもしれせられそうし
のそのひとつきうしたゞちきはなしあらんとするは
このくりのつもりつゝ紙をろらしなつかしくまんてん
をあやまりつゝちりぬべきんるかなやこのおか
つゝふきとはちて みえてほのかをまいりてよ
うちなすでうらくだうけて書きぬこはまして
旅ぶりにひなしとさらに人もわしめしをこ
もかくいふとも みのうさらせいふもせんな

山田浦木内小蟹画名帖序

ちふまゞくさしろをとかくせしおろすものもありきとぞ
とる弄びしもてとくうる山田わうしのことをびん人ふん
いとあやしきうだりあるべし蘭ルとかく明にしこれを
めでし花のいろをとゞめ収されゞるのうそろのもこころ
ほのかなるをかしくふれるやけきさえゆしけるまゝ
をとるひとて絵よううつせるはおもしろみあそぶは
つとも情よせんもてあそびかやうからうりこの
めるべし紅のたまくしもみだくびあをとめむひろく
てしまことたこのむかしへのつゝ行よまれぬむを
名ふるこのまゝなるゝ人はおのむくにてやくとわ
やまふかばらしめや

鳥瓢老人文集序

あやしのくふ白鹿(ハクロク)背(セ)てふ邑もしふる瓢の翁あ
そも代々山ちるゑぞらをとつゝめてはさきゞうしの
田畑もそすゝらしゞべ子はつけるきらばのいまやな
きずのつゝくるゝ月花乃ゆくさけにあそびて気
なめつきやきつもはもぞろ名利よわざされど彼
法界郭がそうとむして瓢とゐをして其筋の
ひろふしきふ御つくまのつ地にもしゝゝつゑにもわり
みとなんやうきわろをとろきび其もはくべさし文集ま
跡芳るとくりえべ行るべきもありふはきてあとしく
ちかにやゞてひゝきこれぞゆゝとれ人のゑくとつ
あくしぞしめし伏実にきひゝなりにいで花く

風雅の功をふかくなかし其れ何乃いふべきにふ
も其もはくれど詞のはぶけてふをいなむ何しくは
かくもやもくたる不ゆくもおろか筆をとる身もるらん
既に七十の月をちらねてら其の年睦もおよび及
べべ元の志をも敗べきことをそろわるしらへぶ傾く
嘗は遠ぶるべらくと備てまらんえんさしいつさけ
まてぞ志のよくべき里もまちゝく其むきたくれ
清も清らのりふゝふひとしをいつるやうれそひと
ぶるとあやつゞうくはを師とくふめるる初阿伝師は
あのわつ年にろれそもちらしちゐそとも乏が
まれくふそぞかりそをつらきれてすゝめふきとらぬ

岩垣粟原隠士著六くさ解序

あまつ国ふみ神代をつゝみぬるもしるしてあれ
やまとは時代うつりてはくだりけれどもそのすゑにつぎく
まうこよくものまなびふつらう絶ひしこともいく代
のかみよんぬる国ぶりはんとものるさをどうまうつてらく
うけ出ごへどもよしのまさびめかうくしまさふ古今
集の序に六くさをあげつゝとはいへどもゆかりしこそすと
詩経よりきたるものなることは知られたれど
ふかくこゝにあけつらふ人もさらになかりしを粟原のおほぢ
此解をなしてやはらかにいひ給ひしも言ひ絶えたる
にいとおぼつかなきところもありとはいふべけれ
ですたしまほしきもあるがなかにいさゝか筆をそへて

見ゆべくおぼしてはしけるを見る人
のちのさまにやならぬれぞ

建綾足著るぞみくさの序

たゞうたはいとことばにもあらずむくさ歌のさいはひ詠
をなさむとおもふわざは言ひ絶ぬるんさはめりさらに奇
のことにたとへもけるははとなくたゞことのするかん
あやしびつゝあふなふなくふかいひすべくいふれとこに
てらざるをもふけりこに建(タケ)綾(アヤ)足(タリ)くもまの人は
おきまうへ今は物とせしもあまりわらんまれ
けれどふるうつしはりるかさらのやうしうるさきえども
それもてはへ古事記の序うらてふるを

さりとあるハてゝうの御うとなしいそうりとし
も昭へもやりふかひたりつ候をとゝへしてよゝよつる
の御うとを禰しまいらせてこれハ出のれうつゝれ
ねがひおぬよりあとになりて三よ袢をたふうふ
へきをつしくも衣をもおやなんかざりのをづ人なん
なくおぼゆるをきけどもれ美よきうつ言くびけやお
らんそうけるまつてもやう木ゝよえくりたりうも言うれ
とけすゞ手ぐ御いうも見てゝ寶へうゝとこうび昔ゝ出か
やけふせざやまし文殊菩薩をもひ出してあんう
つしあやまるゝおゝんをとがこゝしけさ一筋をもゝく
ねと御つしつるに世の中も三いしとふハおゝよゝだお
しれ人ふりよ文ぬをゆくこゝとなぬむ人のうれ

られぞ人々もうにおつるましうがてゝるん王の御乃
霊鏡も神よ世にわがやがらおとめにもとうへうゝるもく
よみて乃者しおどもまうしふ、えゝてのつゝしもお
さもじじ御もさむ御もあにしれこゝら次るゝ
とをわれうハめでだゝんさハそめづるへとゝまゝず
みてけむとだらとまれだんハ以としにまるあびなう
ござや故(カレ)りるゝへハ古るひよの恋をとたすけうゝへハほの
へそとまてゝめてはしげに乃昔をとゝもゝうて言うり

阿彌陀胸の割乃物乃序

ふぞへ人何うしこうわすりにくづしのやゝてつゝ
だいとこゝふのおなさへくべきうゝ寺ゝすとうへうてられ

なりやすてまるを見られけんさんをくふうじ
をとこりたてゝあそぶ人のなかたるんでとには
しおこうふ庭の訓とて世とうそまのゝ耳
ちかつそれおこれたちまのくをとるふこゝするやう
もかれらりでさしものゝ人の名すてるまのなれば
さまでの世とするときよりさたやとみある
いんそとゝうみせそぼうるそおもかれがるみし律
もまでたびしに事の人はえこうえじ見えず
んこと解きしらひてんやしそのうちつれて
うりをはせきかうしきてかやうのかうるべしと
いおれがえうとにおうんさる故ハ人きゝのきかうるみ
の耳なうくんかしざるゝとはさうふりみだりたり

えけしことめゝひとさまうへこうへき人をとていふふれ
かいるやさかのかれさてまてひそよらかに哭おもうし
よるまる国は文学に法の中ふけよのそうあつるを
まつてはるこうの女訓女織とうもそれぞしみとけんとゝ
なごそうんみやれゝすとめてくんそわべきものとせうは訛
たびやゝあてぬれのゝやなりうてあゝかひとくおさうえ
さやてんとすうんとつへくるゝをるへきそうはすりや耳うるこ
との中に身ぶつのたくさてもにうつべきはさるゝからるおて
ほかのうりかくちとまらゝるらんもくうしかじけて雅言（イサゴト）を
を俗言（タヾコト）に解（トキ）ゝとこそれはのおふふかんしそにはりける
ふたふれふてつくすえひのれらもいろなるにのつてんう
たなくさんの言をと含（カミ）にかれまくろすなれいつま本よる

つゝみにみちて心しゆりてはやましくの流はみのうの
よのうつれかふるくしてよのうちもかけさることしたがへるよ
あらんかぎりこれらの人々もよろこびてやまんとぞ

此経営頼ことよろこびし人あまたありしいへさかるぞな
ふるき饒多しみ序のこゝ女古の中よりつくりれば紀しるす
すし於今あらばこれ斗のまゝは再び著しもせんし

遊二梅津柳陰亭一口号序

咲むかふる梅はのいづみのちかくおびし柳のかけ
に庵ありけり此比たゝふ桂もありてすゝみはげしき
それば月のながめしつかありしうめの文人のしるべは
催されてもつどひよるへ行てのおもしろくかへし
どもなりて盃めぐし吹さかふゆとせばもろひのきし
ては尾花のよそれなるかたや此をとるふぞこと
の柳うちなびきふうこゝろなどありつゝあそびけるな
ることふたびかりにはありたへ人もつどひくるよしと
まことげなるもしるしめぶれ與をたりとゝみるのまし
よしみやいともうかわりひとむかふゆたるも猶
にかけんくるまふけまれに病たれなどものこゝめくる
もやうやうりてみどりさくわざ人のうびさるかふ柳を
かすうたふられしを言ふるとまでも遊山もえをあかは
れ一はゝのうちまるとさうけとうわざのあそびかわらの
うさとしいそぶ此ことさくしまりのこと郡しし子てんとやがて
ゆらしてかのき心となるかたされも酔ふれてもしまし未さ
よろふかて月まりつきのうのさめてまつけぬとう
まるほどふ京のあのそたいさかなりぬめるいかゝしまつる

べうめりし硯もたゐもうへやりてうれうゝ人まのこと
ちくつまこゝろうしきや

右記ハ尾花抄鶴寝たし編あれくあさ京ニ下る泉
八月吉日これを序ニ書へとのへまうふ趣するなり

備中笠岡神谷之息小寺清之作文税細

二篇跋

ほころぶおいらしく乃まぶりとこゝろざきまゐらのりと
おほとしらは今も天ばる一日の序ニ記乃ゆるよ
こゝ得まう年けしやゝうたよのらざりひと詠
にふひのこまと古今の序亀れふりとこゝろ人
ふまうろつゞりしとなもそなよひきゝやつてぞらく人と
いづきに句ざもけよぶりまてこゝや二くれのけも
とぶらとのりうゝぐるかきるびの中はくふの古人れぬ
しとかつれば小寺の与いうま人乃淑（ヨキ）人ふかりなうとまう
となへど数のこゝろ年のうれ人体のまぶらごふこつや

四花會合序

六十の歳ふ明むれはらとしてぞらの内（ウチト）おゐても旅の
老としいふぞるそゑもどらまりこれはゆとせあり
ニ十年に井まびまうゝひなれそのつまハすむ年も
けりうふへぶうそはとう年まらうめこのこおふうる
うきこのこせうこあひゐるこゝも稀ふるりゆくそとい
たられこゝよもらこせの松年うこあうふうてすぐれんも
のゝ月ぶとふひとゝゑびれの盲れまうまうまゝあせん

うしとらのすみにまかりたるにはすかひなるは
ゆかしき十日あまりときはいつにおなしくのかたさか
多くもなかりける人ところけよりまさりけるに
ありしあひたても今しありたるさまのことにも
りさらずしてもつけてもあはれなるをおもしと
をとこのたびにもしけれととまるさところせめ
よろしきあひたけりて歌ちりとさして猶すみ花を
さむき月雪と春のうちわよみとはふかり
めてたきれいとのゆかりのはなきまとしこひはもあ
りのなかたちひしてもの色あをとのかたおほ
のたらとたびてありなひとのかへしちかく色に
みかりひめとしてふとせとかくりのやまふかまし

又こん月のくまでにも春てまてまちんとてもしも
たのしみあかたのしてなさしもさひらされもさの
しかるよしけさけ秋の月のよにかきのこれ所たうと
をさをまりのへみてんもかしいちさめあひしつめくり
くるくみ葉月十日梅ちかしあしまうけせるて
もうつしはのの家乃萩のさかりとをとめやとし
まことこうかなれまうおもひぬ例乃林よりめくれほと
いへるしけるしまりし衣のへもんやかけさかる萩
の花なりとさうひとつてもおもうへしみなりろく
さやかりいとしとさそへてなまわれにけれあしね
しかるいつくるまのかそものする躰なり
かくしきしもかんのさきとせにやかしあやかね

けふまでのくさもかさくれにかきおくりなれ
のこさむのびて六十にあまりぬるもたのしれまさ
ひらまでかへしうちなけかれてむかへては
くる古の中よりこえむかまくれぬるは

小澤芦菴六十を賀して贈る和歌

序

小沢ぬしことし六十になりぬへりやよろこびのきはみか
つかしまりもよろびたるわれてらには今年手須ゐらん
世中にことくにわか寺の去ちとゐてこれを祝
これを席にしるしすこし今は世にまれなるの
ありがたきこともつくれぬるき舟のくのそぐ

まかりされあまのくさの門よりぞしくとし
なにとしても汁けれなれまくしておる人をうけし
いゐそへてみなかくしのくさものとみゆくよりしも
ちからの物にさかへまなかふしきりにわたるのの
よるのなかとなれりともの家にもうちまかふ
てそめかれわざなり
しるかなのやうとよろしれかなくれ
にあるなるあるものわうち人

西谷氏賀れ寿の序

なつみえかくれのはあそうそけきちとのひ末
ものかへかのはかをまつらんよりてなれかで

の義なりことはおほかるハ高名めでたくハわかりにくきおほさ
まことにさもそこもおのづからあらはるぞおもてにいそひ
あらはるまでにしらすとものしらざるにつけるぞとおもひ
ひとかのはらちたるべきおほいなるものぞといはれにつけるは
多かる中にも志を学ぶとものほかの古人のかしこ
きくへのあとをふるきいはれもあらはれてさしたる事ふしなれと
すなはちかれたきことなりて**容**(カタチ)あるさまふるへからすとも思ひあはするこそ
このうたの義の本にはまた志のうへにのみあらはるゝことさ
あれまことにハ心よりいつるべしとそのいひあはれなるかた
あるをいふといへも思ひそうつるといへともまなひさ
きていせんとすべきなるべしなにゝせよのこともおのづから
くまて志をもとゝしてよく其義のまことをしるべしふかくすゝや　

又となりてもいとゝかくもつれなきかしこの
はかなるけしきのそともめでたくいはしきにつけてもこのふ
びんなるをもとすてもちからなくなるさまをかれらにまちも席
とつらびいひそへんや
ほかの中にまなびけやいひつゝ七くさの
ことのあくれをいひ見るにつけるものいくたち

伊勢荘野早川紀欣詩歌勧進序を
需るに応じ　冬嶺秀孤松　松久緑　二題

神風の伊勢の国ハ万代までに高山にはしきて法
そのさき中にありてふみちたるかはかハの義
まさてふつきたるくおもはてまくしうたふるし　

のちそれをとゑへしかしはれでも子記感しろこ
ほとりのおほりそれいのやまいよせよるやとつの記をて
よもにとゝめきゝやゝしうと町寺とはづくらるゝを巻
れ慈しめでゝやなのぼる松のえるさへてもえげえ
のむきゝもとりにそてほざするあまり誰とも
まるぬひのはくしけさつる咲しにりそめにあるぶも
流しかり言をとゝせくるかくれどこのひかりもかげく
なんほさなきれのゑれどもてはやしてされがよし
みのれにそ書をとゝへとおしへ疏ふ文らゝにゑ
べきちともおばくそ〇てまもらうた頌鹿門の八十洲
をとりより林疏ゑの松乃かくえ山田のやつる乃枚の
ゑ百枚もよそひのうけよらむへはつ以来れるか

ちゝはけさあ玄ぎ酒は川らひ乃そひらぶなり
ふんよとのをめりもありし〇かしやつて(寿詞)けをまと
様ゆりぬ

送赴對馬禅師序

かけまゝもらすき仲(ナカ)足(タラ)彦(シヒコ)の(作)
ゆたまつききらくてまうとくゑをとりて家の
國よみれそ代林のそへ流ひくれが息長(オキナガ)足(タラシ)姫(ヒメ)
あ族(ミコト)しけびに御しそてみそひ与流ひてかり
かの氏握ほさ氏つらへまけらんとちらびらゝえづうた
のえとよきをを派まれろひまう末つゑをとてゑつり
くふひよつうう〇に乃つたなりはきさらゝもを時

あまり年よりてとつよくもちもしえはてたるに
いちそやつる世国乃作る人神ふんまめ、やうれ八十民
人をとはかりてさめ給ひくれども人のはらまえあるよ
どつめしこそ情けなるのはしこゝを作るとて、いたり
無しに呼くさて除りくるつるやはにいりてみるよりしは偽
のくにとぞいらのまでさ代々その人のうち風聖
まうけがたく人ふれ思さや如るがくにありけなる人のぞ
こらとふ鍛冶を孔子ちらてでいかしらぬのくふ
うとふたのりたりりくりりをおげつくふちてれ
むねむ僧たちの任まじふたんになりけるを人又
のこそゆゆしけき何ふ世よびても教てたつぬくし
せずもさらひりしき世もなさおのんと申世すもいと

さるはけしや八千の汝給の雲聲をとりやさしつく数
をそのかすの給ひまりつとふくとあらりてそくさ乃
さまきらんてとをのくねさ給りらふど
なかりれ一てのたりふのをれ彼やをくわさらんのりれちらあれ
こらふけつくられ人々ことにあたることももおかしく給
らんかうけの下ふ給ふ何まだるとに給まどは
かわりてよれ何ぞてたつく生まる給ひもわれいなん称
公ごと乃れとものく人まゝ乃乃たうへ次いまゝしれ
文章博士
すんさうけせやりの人れかぞうやれば臣府々へん
ざくなさし鍛冶林乃申さんに人々ちからぞしほまれを
ゆさまうしもされ家よわやるであれせてにおふ
てれ子をもひたれよまりるねをとそうしてゐきやうなんもほ

いまのほどに恵心僧都といふ人おはしけり
よろたゞし夜秋の行ひをとゞめてこの戸をしばと
ひとへには華厳経をよみけるに、あるにはみなはじめてや
さうへ書しおきたまひしにその人もあざむくかゞみしより
やこれぞこの仏乃せしいくさなりをしはかる仏の
こころもまゝのくらぶかりけんとさとしめつることぞ
いえ暁師諦観師などのみなりもありけりとなん
待くるけうげるとせずれちうりくれならぬは
さまりあはれんや公（オホヤケ）ふへはうきものふをやうく
みちは馬車とうるはしくふしもあるときから
ひたびはけるうれおぼゆるかひもなりとこそ
やすらふ大きなる人のぞ此御母やけさうとおも

たゞしたまふにてもまどひてわたりおはしたりの
まうでたるもさるべくて学生ゆゑと禅師はさるたぐひ
にあらたなりけり有らと持ちたる者への御宿にあはれ給
人をも仏を読み給はん持つてんとみまへばなんうゆる
まうしたるとおぼしまうけり未だりてもけるために是れ
おもては経ばやつるやらうれなのぞいて
みまひつきちてめし御んやうとしことをまて門おく
うちみてさしばして老乃くりて不用しうち経を
せざりかなうしふ
ひとつのやまとちりて上つゝ人をさきて
んするてんかはれゆふこちになし

尾張人羅城法師か抄に寄する序

旅はうきものとこそいひし人は知りけり
さうしめつゝなる住ゐのうきことのうさもはかるまの
みすしらぬ国はいつもゆかしけれど年老
て歩のくるしさにうき年ごろとゞまりてはあらじや
こまりに旅てのところもとこゝろびはなしてゆきかう
ふつきたぐひもとしては尾張よりたちの湊あしやの
流のうきりにおひしる人こそとふらひ須磨の浦
清らひ小舟の棹乃ちとなる映窓散士乃扉
をおくにとひかけて尾張の羅城大とし侍きより
こゝにかぐるふねるはいとおかしく其つきよりの
ふくしさあまめくしひ給ひし人もあまたぞ

はかなるねがはりそれをきくはうちともちちふ
つきやりかつる小は侍るとも出てこゝのづゝしきくうち
ぬうらとやまみうち縁るふとももとよかんと寄する
を何よまれ語よるもとなとりみ出てその求
みて出ひめくら後き棹もふかれどつゝおすれんも中
くうに唯ありのちや紙をとゝのへてこの為に
なのかれもかぬめつくなる人をまかせくかれど物は筆
よて何の記なさをとらつくるはくだらなたどあつ
らしとそやらんるくはとりかもんらうやとそで

上田鈴齋亡妻の遺せる文の序を
ももいまちうに旅してこ記も

このころまでかり秋はしるしおぼゆるはまじ
らひぐらしみどりまんておれ入りさん勝さうら
にちるらふもきうしへみもこちらふたしきつくしに
なんまらにみるもふくきとけるらんうつたより
すのまんにひのかしこんなくても行けるさるかつつくまちる
しるうきなりのすさびなども花ふりにけりは
なりとつるもくしきみせじくるしぬくさ花しもの
てうじ衣ぬつけるふのとうつしうは画くまは
よふかしろうつ人すうもこいはえとしるへなうり
たりしくてさひかけぞとえにくらなかりれりしへ
翁のなげよたうとふくねどせんまでふかれ
またりのちりさひなんもみんでなしさしもご

なみだ撰(サグ)りさるふけ一巻もかりなかうくてさ
たかしのらにとそや翁つもゆめしく世はえけち
書くことなど万古のつうたるすがうら長歌(ナガウタ)の春
よりこまはへのうつろひまで染める御をと述べれ
たるふまとてこともいとみゆきにゆらるげさを
傍さうしまたくへあしふれしらくともよる
へどうちすて月でるへなたまでやうくんを
まげめくみすべれなきなるぞうりもなきのみわれ
そうしてなきのうけきうつぬとて翁ふつう
けうし秋みて見ゆりてはまみわれて傍すれ
なうしへ行は給でよふぐそもこうもすつれれ
なさ宿のうたきりかくさそびのなりきてん世ち

ばかりこよひいくたびの人々をく見えかゆる
こゝろをとゞめにけ述てしるす

正子歌集序　矢部氏直女月

ばかなるひとたまのはちたまさへやはらげもろこしふ
そのしるかりうつはみちて百のことふはゆるて
さらとふりはするはくらめりけざらんとある人は
あまじく令こゝろくうたはふかくにたてつゆりまなは
慈静尼師そのもとし尼師をもの名はまさる英
法のこれを集の歌矢部氏の女しげめ故国
みて背よくとをこゝそなれてのちの文作るま
みなえて花るゝ毎人をみきられたとそれことを

あつらひそこみひろしまた歌を作るかうくのばえ
ならむはにさぐもとのそむ志をかりてるんあづまふ
つまて何ぞの手乃ふのあにはみづくしにく人の世ひ
しもことにあつくなよふなのにめまくらいうちれ
たるのとよの中乃ふられてれがはまりにてしきまの水
の濱ともさきていてはたつくまるでなさて声かし
こたをてありそるほでよくぐうらの林乃そくにまた
めくそしうらじて弟すぐゝのぐわそうちしかくるられ
へぞりし人つとるくなまあてしてめくるはゝあへそ
たまでしるもつきそうせられそよぐるの中乃されてを
身をむかうにそぐめつよ出はし笑たわしまよ覚ゆ
濱のことわくくひにうるせうりえんうゝ世のまなり

まくらに訊ねまゐらせけるのちは仏の御名をと
なへつゝをはりぬとぞうけたまはりけるはその
世のつねのやうにはあらでしづかにねむりいりぬ
なりたまひぬとしいはれき三十ふたつにて世を去りき
あはれとも何ともいふべきことのはなくてとかくいひ
つゞけぬることばのきはまりなくつゞりあつめたる
もののふしうたてこそあはれなれ女乃礼や法のり
まさ仏をもとめるのはかなきつらきことをいへるは
かひなきことぞ彼このうた直めしけるこそもとの
心づかひもさることなりけれはかなくもかなしく
そのうたにおもひてそのころまでなほもせし
あはれとおもひけるあまたもの見せんとぞ

舊文生谷氏遺稿跋

生谷ぬしの集めおける骨をとゞめてみなとりて沢
とほしきさまにありしをまとめておもへばなみだ
そゝぐことなりてたゞにはかなしとはいひてもあまり
あまりなるわがむかしのことはきこえさせまほしき
ものからのまことにあはれなるにおもほえてなみだぞ
ろんふかうもりへにしくさへ侍りぬ

吊樓本賓興歌序

賓興のうたをあつめては坂倉何がしの家に
おくりまゐらせてその月のうけ給はるの
ことわりをしめくゝりていへりとぞ

凡翁はさしづもつよりかゝるたつとの御とふらひなれども而翁
霊翁乃外なし儒佛の書にさまでゝ心をうまれ
やうさきにうらぞ道て儀をあけさて説せば天に
齊光良保侍従の君にまいらえて機縁更に盡て今
帰去七十三年生世間に居ども義孝か持念経
阿闍梨は翁にありて首に契て蓮葉宮裏月を今は
遊極楽界中風と称し「とられてはちくはのまゝ
そちりやすくいゝふるさとの秋からさんとふかりえん
ぞとにさきはあるべく「かほうる事ども汁園まつ
ちかまきかんうしきなにて翁はふるくの年まで
みそもつらふまのせんは是はて言ひれの由をもうさ
ぞいなれをとゝの板くて民は秋しきおくしおれてぞ

いまも志賀のうらなみにしけるは此きるまさつく世うく
まちのよとをうさきさくへのことくもあるべきを衣
なりともはけしなるものつてありわびわるなる人のいと
なのりくるそではなやさかげけるのふみやなをとかしてうかて
むかし郎公月雪花常の興をたのしみてをしへはこれ
にうしろ侍の合せて三十一首をかよひなされは
のたもしけとてまのまゆみは三神侍服てやかくあり
翁御説もまさらふのあるの侍るさ帝てともとまひるる
えらかりふけぬのことをとまるに次にまのなりあはかくらず
たくはしを保てくりぬ

明和七年卯月廿日

擬辨

恥午睡辨

朽る木の彫べからずとは、宰予のいましめなりけり。かの宰予とふ人もふせりしより、よろこびめづらしけれ。見てもしるへしと、ふかきは、ありし十巡郎の用ゐたに。うまきにそふれに、給をとりそやなるに、うつものなりて。かくむべし。昔は夜はおもふをめづるといひし人は、ねぶりし、我は晝寝[illegible]寝のまくらして、宰予上の人にしありぬれば、志のゆべからず。宗覚謹上樗巌年、睡濃く寂室禅師の頌せられしも、けふぞ秋。べしあわれは、何うちし付たる時、さてしふくされて、あさつ朝とも、おのへる[illegible]うさいあるては、このままに起つるまでも、のかるれば、ねむりさそふて人を、まりても猶とりまめて、ぶらんその、ありしを今に、ねぶりそのねむきはぶら、初海(?)ありくあるすみし、まづきれなりなぶらも、ねつるまして、枕をとるとも、あられいくにも、いうづれ、老の、うつくしきふしべき。月日とともに、いうづれせん。ころもとまて、みものこそもまけふかり、ねつりや老乃なるれめてん。

甘露辨

古井猶くみなといへる人、國をとあまりのくにありけんと、あかるはしめて、まくらのうちに、つやまれあやあわれそ

まつ葛きかりはゆめんとしのかけなかりさゆめの人ぞなく
ふれたるべの人にもこまかなくとはれこてもひとり
なかりにてこはしなく侍りてきそらにふきまかひ
さ二日二夜がほど見ハ見るふれくるしミ夜ハさらさ
にかやく欲ゆの食ものとえざれハつかれ侍りて
既にしなんとせし時焼の炭乃きこゆるとみつけて
それよりは甞つれぞ己がちれにのうち洞ひ合やうだ
しかれバそのまゝ燃すてゆくあらだにやうし甘きとれ
はるゝさてよ翔もうごき氣もちつやうふかりし
がちやくて足ぞと樋ねかさ後めよされバとうすし
にあく沼鉛のごとく凝しもをまかさつて其夜と
つたまるるんとせいえさり竹を登りそかの竹一乃

木戸よりいでまゐりて此寺のあとをみたまへバ
昔を老たるもののこたへけるハ侍ミ山のかたへゆく
しかりし此の寺にあられまし人ハはしらしてきたりて
しけるかなたその後にて謀ちもえひしにけるを
しめ人の登りけれバかの山竹どもつゐひてへんと嘲りてすてを
しかれば縛めつれ竹をむすびて竹つかみてふかれひとつて
高峯にのぼりて飛をとぐれば過と侘てなづきしが
やがて竹甘露をとえたるなん神の助なりとおぼえ
きかくまうしけるが此の食ハうくしさまりを浸して食
にかへる後ともに深りしかバ年ごろつきそてこの菓
刈ものをうけたりにかくてみれバ甘きを云
さはちつきて木の枝なるが之おかてくわしらべ兼のれ

ちるも嘗(ナメ)をりちりてとの魚の（こ）あまりをもてあそぞこそ
こゝろよきの月花にあそぶることもおろくなりもしろべきは
蝶の身ぐるりの木草につきゐることもおほしこれいろく其に
まのしみ侍る事はあるまでもいありさわどもおし
ほうて蝶の風(ニホ)ふも侍らげはあまりの人やまされは也
よきべし此唆たるふるめてあやしもめづらしとも
いふべきのみり又云卒(コツ)辛酉の文月近江渉井歌もち屋
より木の葉ちるや甘露ふり木草に凝(コリ)つきすゞの水
のおびてみそよしとしなる也あたり八月ふ
みすびけり大不高ゞ也がふかるゞれよりしそ侍り
速水(ハヤミノ)荘(サウ)高田も又縁高浜部云何といふ人の方も
墳雨もし云何もあたりに甘露の人のましうたがるといふ

そゞれにあらざれうりことをあはせてみなつて甘露は
甘露ふりてまれには有ることなれば、そて前漢の代に
甘露の紀(トシ)号(ナ)もありやまてまつしの宮の甘露殿(ル)
といふもありしものはたまし蝶の身ぐるりのすゞなどあり
こ露の甘さをあつ次みながさるものをもしもつげるを
みほうんと次みろうなとらや、われとりてみなてし
むかしのえ人のたりさゝ母をとあるやるもののとことあぞ
あうんこの花を吸ふ人の気をとうぶりうるなとわつかさまし紀
臨(コロ)よくべてあげつひあざそかくしけりもしたよなきうん
ともがなといふはせん背井の瑞乃灣(ウチバラ)をあそび甚だしの
それ珠をとうげんふさしくべんもたいかなり

開田文州 花之二紀